志村 恵「本の中のふたごたち」㉑

ジョルジュ・サンド：『愛の妖精』

「男装の麗人」という言葉も、今ではすっかり死語になってしまいました。お年を召した方なら、「男装の麗人」と聞けば川島芳子の名を思い出すでしょう。しかし、フランスにも有名な「男装の麗人」がいました。それは、「ショパンの恋人」としても知られるジョルジュ・サンド（1804―1876）です。サンドは、本名をアマンティーヌ・オーロール・デュパンといい、不幸な結婚生活のあと作家活動を始めます。しかし、当時は、文章を書くことは男の仕事で、女は家庭を守り子どもを育てればいいと思われていたような時代でしたので、サンドは、こうした考え方に抵抗するために男装をし、男の名前を名乗ったようです。さて、ルソーの自然観の影響を受け、社会主義的な考えの強かったサンドは、1848 年、市民革命が挫折したショックで落ち込んでいました。でも、友人たちの励ましもあって、民衆の心を豊かにする作品を書くことを決心します。そして、書き上げたのが今回紹介する『愛の妖精』（原題：プティット・ファデット）です。

富農のバルボーさんにふたごの男の子が生まれます。それぞれシルビネ、ランドリイと名付けられますが、この二人は本当にそっくりの一卵性双生児でした。ところがバルボーのお上さんは、「わたしが心配しているのは、ふたごくらい、そだてにくいものはないっていわれているからなんです。どちらかが死ななけりゃ、かたほうが、じょうぶでそだたないって話ですよ」と、息子たちの成長と健康状態に対して大きな不安を持ちます。そのとき、産婆のサジェットばあさんが「そりゃあ、いろいろなばあいがあるけど、あんたがたのふたごは、べつべつに生まれてきたみたいに、りっぱで元気だよ」と安心させてくれます。50 年にわたる産婆としての経験から、サジェットばあさんは、ふたごの場合色々な問題が生じることもあると包み隠さず話した後に、二人の健康状態について客観的な判断を下し、両親を安心させています。さらに、サジェットばあさんは育児方法についてもアドヴァイスをします。バルボーさんが「だけど、ふたごってやつは、あんまり仲がよすぎて、はなればなれにたると、生きていられないってこともきいたんだが」と尋ねたことに対して、ばあさんは、「おたがいに顔がわかるようになったら、いつもいっしょにおいてはだめだよ。ひとりが外へでたら、ひとりはるすばん。ひとりがつりにいけば、ひとりは猟にいかせる。（中略）ふたりいっしょにしかるのも、同じ服を着せるのもいけないよ」と、ふたごをそれぞれ自立させるように、なるべく二人を区別するように忠告します。そして、別々に育てることの具体的な方策として、別々のお乳で育てることさえ勧めます。これは、昔はふたごが生まれたらすぐに里子に出した習慣（日本でもヨーロッパでも）と同様に、出産直後で体力が落ちている産婦の健康を配慮するところから出たものだったようです。しかし、バルボーのお上さんは産後の肥立がよく、乳母を雇うお金ももったいなかったので、結局二人とも自分のおっぱいで育てました。

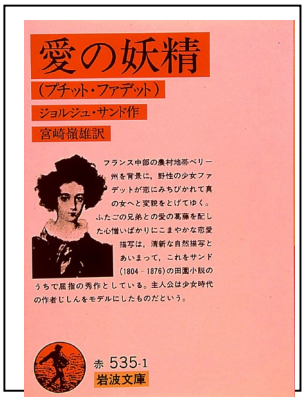
バベットさん夫婦は、最初はサジェットばあさんの言ったようになるべく二人を別々に育てようと努力しましたが、村の司祭に「神さまがしぜんのうちにきめられたことだから、人間の力でむりにひきはなすものではない」と諭されて、その後はそれを段々と気にしないで育ててきます。こうして、シルビネとランドリイは、お互いへの愛情･愛着が深まり、ちょっとでも別々になると悲しくなって、どんかことも手につかなくなるほどの撞着を示すようになります。将来を心配したバルボーさんがいろいろ別々にする方法を無理に採るのですが、なかなかうまく行きませんでした。

さて、二人が 14 歳になった時、神さまは「このふたりにも、ちがった運命をさずけようとなさった」のでした。つまり、二人の住むコッス村の経済状況が悪化し、さすがのバルボーさんも二人のどちらか

を奉公に出さなくてはならなくなったのです。こうして、比較的体も丈夫で、精神的にもしっかりとしていたランドリイの方が奉公に出ることになります（ランドリイが自分から言い出します）。ランドリイは、この奉公先であるプリッシュ村で一生懸命働き、奉公先の親方の信頼も勝ち取り、やがて自信のみなぎる自立した若者へと成長していきます。一方、弟と別れた兄のシルビネの方は、そのショックとさびしさから段々とひねくれた、じめじめした性格になっていってしまいます。そして、ランドリイを独占したいというランドリイへの嫉妬心から弟を精神的にも縛り付けてしまいます。

こうした状況を救ったのは、やはり人との出会いでした。ランドリイは、不幸な境遇を生きる少女ファデットとひょんなことから親しくなり、やがて二人は、いろいろな出来事の後ついに結ばれます。ファデットは、信仰深い女性でしたが、同時に薬草学に詳しかったり、ものを冷静に合理的に見ることができました。そこで、その間すっかりバルボーのお上さんの信頼を得ていたファデットは、ランドリイの結婚が決まった後さらに孤独感を募らせ、病気になってしまったシルビネを治してほしいと頼まれるのです。もちろん精神から来る病気ですから、ファデットは薬草など使わずに、シルビネと二人でじっくり話し合うことで治療しようとします。やり方は違いますが、今で言う「カウンセリング」のようなものでしょう。その結果、シルビネは自分を取り戻し、自立への道を歩み始めるのです。もっとも、薬が効きすぎてファデットに恋心を抱いてしまったシルビネは、それ以上家にとどまるわけに行かず、自らを奮い立たせ、結局軍隊に入ります。シルビネは、そこで人一倍努力し、（大尉にまで）出世し、ついには（レジオン・ドヌール）勲章を得るのです。

この小説は、サンドの自然思想と倫理観をよく示していますが、ファデットとランドリイの恋愛小説としても、あるいはシルビネとランドリイというふたご兄弟の自立の物語としても読めます。また、ふたごの自立を意識的に促がす教育方針と「神さまのおぼしめし」や「自然」に委ねる教育法の調和を考えさせる育児書として読み取ることもできます。しかし、150 年も前にふたごの共同性と自立の問題をこれほど的確に捉え、そしてそれを一種の心理小説・恋愛小説として世に問うたジョルジュ・サンドの作家としての力量に感動を覚えるのは僕だけでしょうか？ふたごの、それも特に男男のふたごの自立をめぐる葛藤を描く『愛の妖精』は、ふたごが登場する小説の中で僕の最も好きな作品の一つです。子どもたちにはダイジェスト版を、そして、大人たちには全訳版を心から推薦します。



ジョルジュ・サンド：『愛の妖精』書影

ジョルジュ・サンド：『愛の妖精』（末松氷海子訳）ぎょうせい（少年少女世界名作全集 25）部分訳。
『愛の妖精（プチット・ファデット）』（宮崎嶺雄訳）岩波文庫、全訳。

『ツインズ』46 号（ビネバル出版）から転載・修正